

## 第8部会

の段数の変化による遠近感と奥行き、さらに螺鈿などの反射による光彩の多様な装飾性、朝夕等の自然の運行と季節感、和様として強調される柔らかさというより、変化にこそ重要な意味を与えた結果ではないか。垂直軸と水平軸が注目されるが、さらに目に見えることのない物質の内面から放射するものを意図した荘嚴の完備という意味をもつ。見える見えないかが問題ではないということは、光明自体の理解も、より確実な救済の強い確信というのみならず、むしろ見えないもの、臆気なもの、変化し不安定ともいえる光芒に、実生活と目に見えない世界をつなぐ豊饒な緩衝体としての役割をもたせ、移動することによりその表現が変転するシークエンス景観を超えた、見えない不完全なものに完全性を希求し、転変する光明を媒体として、あらゆる状況に適応可能な臨終場の設えと空間設置を進行したものと看取される。

## 存覚上人における来迎思想

平井 幸太郎

存覚上人の教学は、親鸞聖人の教えを善導大師・法然聖人の伝統を受け継ぐものであるとされている。多くの著作の中でも注目されるべきはやはり『浄土真要鈔』であろう。幾つか挙げられたテーマの中から今回は「来迎」について注目したい。方法としては、『浄土真要鈔』に至るまでの来迎思想の背景に言

及しつつ、最終的に存覚上人の来迎思想とは如何なるものであったのか、考察をしていく。

まず注目すべきは平安浄土教における来迎思想についてである。中でも源信和尚の『往生要集』は平安期の臨終来迎思想を取り上げたものとして焦点が当てられるべきであろう。『往生要集』では、基本的に臨終に正念を得ることによって来迎があるとされている。言い換えるならば、あくまで『往生要集』における臨終行儀を説かれる意義は、臨終正念を得るためである。その臨終正念によつて臨終に来迎があるという考え方は、平安浄土教の来迎思想を端的に象徴したものである。

次に法然聖人・親鸞聖人の来迎思想についてである。鎌倉期に興った法然聖人の念仏の教えは、臨終中心(第十九願)から平生中心(第十八願)への移行とも言え、臨終来迎を特別視するのではない。『選択集』や『逆修説法』の中で、平生の光明撰護の後に臨終に来迎がある、という論旨の流れがある。あくまで平生における念仏を重視された法然聖人にとっては、来迎の意義自体に独自の思想が窺える。この法然聖人の流れを汲み、思想を構築されたのが親鸞聖人である。親鸞聖人は第十九願の行者が得られる利益としての臨終来迎(『末灯鈔』)と、法然聖人の来迎思想を平生の念仏者との関わりの中でより一層推し進めて捉えられている、言い換えれば他力としての来迎(『唯信鈔文意』)の二つの理解があると考えられる。親鸞聖人においては、他力としての来迎思想が特筆すべき点であると考えられる。

これらの日本における来迎思想の変遷を踏まえた上で、存覚

上人はいかに自身の来迎理解を深めていかれたのか。『浄土真  
要鈔』では十四の問答が挙げられ、その中来迎に関する記述が  
見られるのは、第一・二・七・八・九・十・十一・十三の問答  
である。内容を整理するならば、

諸行の行人（第十九願の機）――来迎――胎生辺地の往生――

方便

他力真実の行人（第十八願の機）――得生――真実報土の往生――

真実

↓来迎にあづかる＝報仏の来迎＝摂取不捨の義  
と示す事ができよう。

『浄土真要鈔』に見られる存覚上人の来迎思想は、親鸞聖人  
の来迎思想を承けた第十九願の行者の利益として捉えている。  
なおかつ得生を挙げ第十八・十九願との比較において来迎は方  
便であると定義している。しかし親鸞聖人において推し進めら  
れた、他力としての来迎という理解は存覚上人では見られな  
い。あくまで存覚上人の立場は、法然聖人の平生の重視と親鸞  
聖人の来迎否定の思想が背景にあると考えられ、それが来迎は  
方便という、親鸞聖人においてみられた他力を基底とした来迎  
思想には言及せず、法然聖人の来迎思想にやや傾倒したと見え  
られる。

尚、この研究は平成二十年度山内慶華財団の援助による研究  
成果の一部である。執筆にあたり、この場をかりて関係者に甚  
深の謝意を表したい。

## 中世武士と一遍・時衆の周辺

大山 眞一

昨年度の日本宗教学会第六七回学術大会においては、殺生に  
よる罪業観、罪障観に起因する中世武士の生死観を、鎌倉仏教  
の祖師である法然（一一三三―一二二二）・日蓮（一二二二―  
一二八二）との交渉から考察した。法然の生死観を来世的死生  
観、日蓮の生死観を現世的死生観と定義づけ、中世武士の信仰  
の選択肢が「来世」か「現世」か、来世的死生観か現世的死生  
観の二者択一を迫られたことを検証した。今年度の第六八回学  
術大会においては、その二者択一の一方の選択肢である現世的  
死生観についての論考を深めたい。浄土思想の究極の姿を日本  
浄土教の思想的変遷に求め、特に一遍上人の思想である究極の  
現世的死生観に言及し、一遍没後の時衆と武士の交渉から中世  
武士の死生観について発表する。

日本浄土教の変遷は、浄土宗（法然）から、真宗（親鸞）、  
そして時宗（一遍）という宗派を超えた思想的変容の過程を辿  
ることができる。しかしながら、同じ浄土教系の思想でも、一  
遍には法然、親鸞と異なる独特な思想がある。十一不二の頌  
（思想）である。その思想は一遍が絶対者（阿弥陀仏）と個人  
の関係を不二と捉え、「南無阿弥陀」という名号に全てを収斂  
させた点に大きな特徴がある。換言するならば、その一遍の思  
想は法然の来世的死生観、親鸞の来世的死生観を経た究極の現